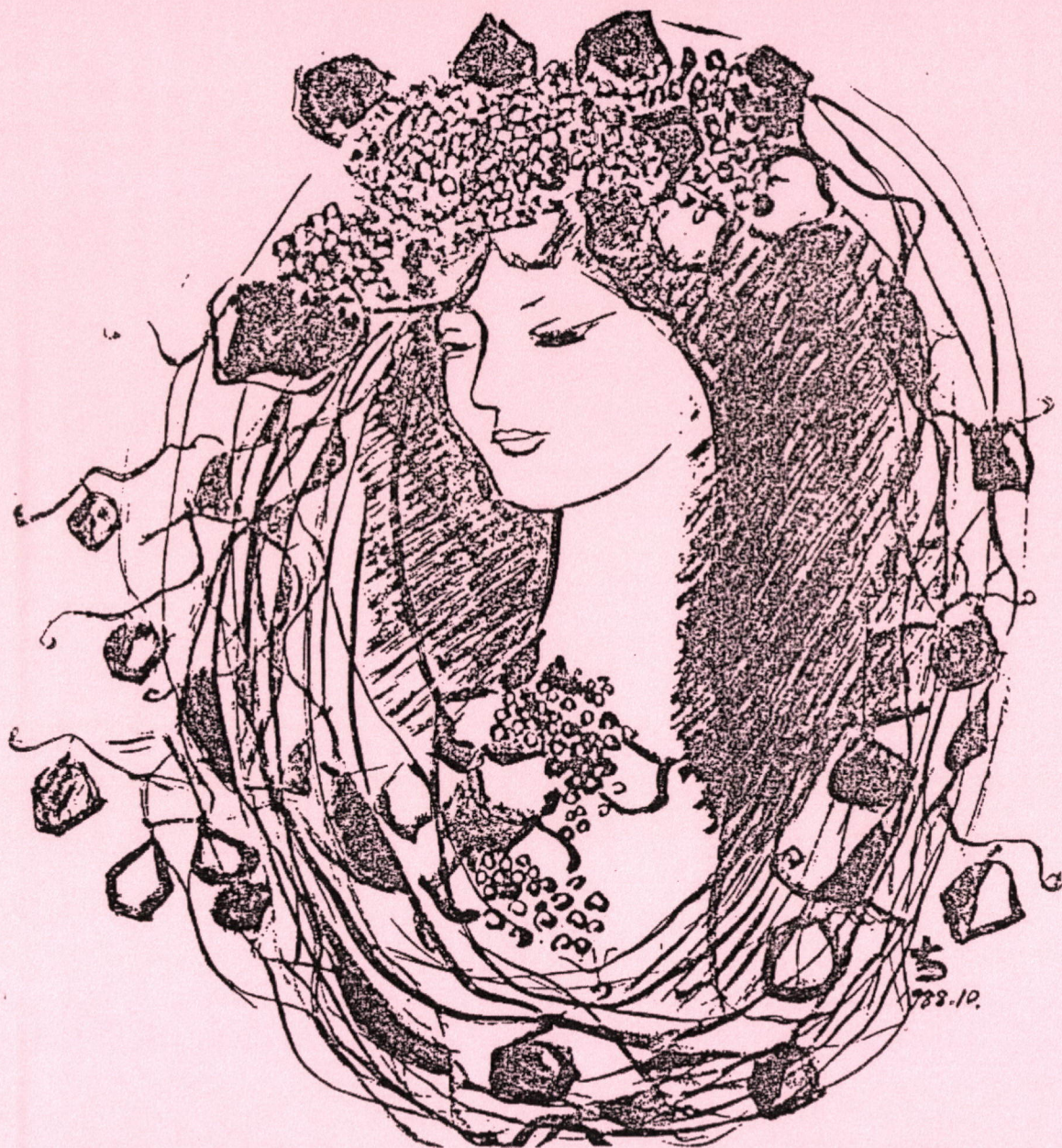


別冊・おなご



第4回 壬三忌・1988.11.6号

市松人形

・渡辺真吾 3

引き揚げ船の

演芸会

・佐藤ますみ 5

姑の戦争当時

・後藤忠子 6

針仕事

・小原 昭 8

ある戦死

・村上未子 9

と

まつを媼圖書

「奉安殿」の慰霊祭・石川純子 13

父と母の戦争

・小崎順子 21

■別冊・おなご・No.6・第四回・千三忌

戦前と今

・高橋ふさ 25

にらの花

・高橋つか子 27

「おにたえは、いまから

征かねねのたしと、おふくろ

涙流すのよ……高橋二三男先生

圖書 28

千三忌

・鬼玉智江 43

あとがき

死者位置

・小原麗子 44

■表紙・鬼玉智江

■カット

鬼玉智江

小原麗子

セキさんはネ ホントに

背の高い カラーツとすた人ひな

見れば頑丈な いつもニコニコでな

いや味 言われでも

その場でおさめひな。

えっつも こんど

ほうほうと燃やすて

眼めちめちやいすてる人たったとて

煙りばりひなく

息子征して

息子に戦死れで

泣いてるんいやないかい

るんもいにも

そう 思ったった。

高橋セキ 1966年 2月23日 没



「牛や犬の死んだようにしたくねえと思って、ながい間に
少しづつためた金で墓石つくってやったす。オレ死ねば、
戦死した千三を思い出してくれる人もなく、忘れ去られて
しまおうべと思って、人通りの多い道のそばでだす」
と、七十三歳になる母親の高橋セキさんは言うのだった。

くい原徳志著 『石つちに語る母たち』 未来社刊より

市松^{いちま}人形

渡辺真吾

ふれると

小さな

人の形の灰が

指の間から散った。

原爆で消えた

子供たちのために

夏が廻ってくるごとに

一体

二体

ろ 三体と

オカッパにイが栗もまじって

四十三体

ひとつ

ふたっつ

みっつ

かぞえてみると

遊びに出かけていたり

よその子がさいていたり

数があわないことがある。

むかし

4 小さな命を守り

身かわりに

こわされすてられた

ひとかた

いまは

こわされすてられた

小さな命のかわりに

そのときのまま

微笑んだまま

増え続ける。

貝からのなかをすべる

白い砂の音がする

彼岸花の白が落ちる

沖の方から

黒い雨が走ってくる

眠ることのない

たまゆら螢火^{ほたて}ゆらし
三つ折れ人形^か
音をたてて
立ちあがる。

(一九八八、一〇、七)



引き揚げ船の

演芸会

―母のノートから―

満洲はコロ島からの乗船だった。

日本に帰れる嬉しさで、炎天下の、しかも木陰の全くない中で、何時間待たされ続けても長蛇の列は動かなかった。

午後になり、いよいよ乗船が許され、目の前に横たわっているアメリカの貨物船に乗り込んだ。細い鉄の階段を降り、船底の船室に入ると、そこは広くて豆電球だけがポツリ、ポツリと光っていた。終戦後、初めて見る電灯の明りだった。夕食に白米の御飯に魚のみそ汁が渡され、これも終戦後、初めて味

■ 佐藤ますみ

わり御飯とみそ汁だった。おいしさに泣けてしまった。

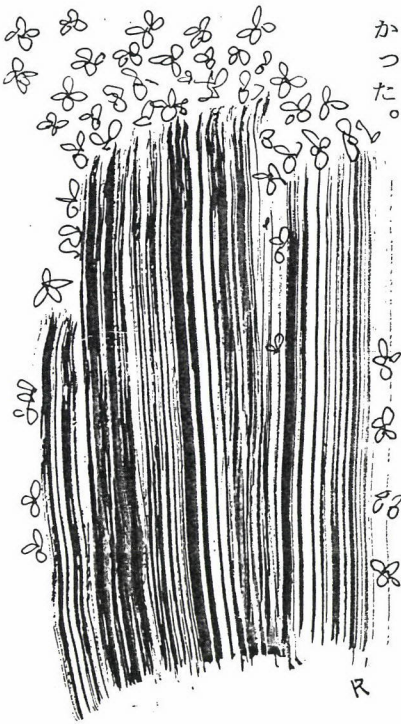
船旅で一番困ったのは水だった。水不足で子供のおしめも洗えなかった。また、あまりの暑さに夜は甲板に出て涼を取ったりした。甲板だけは大きな電灯が輝き、まるで昼のように明るかった。そのうち引き揚げ者たちの郷土演芸会が始まった。手品をする人、歌う人、踊る人と、各自のお国自慢の芸を披露し合った。この時だけは、誰もがすべての苦しみを忘れたかのように喜び、拍手を送り、えんえんと深夜まで続いた。そしてこの演芸会は、日本に着くまで毎晩くり広げられた。

昼は甲板に出てみても何も見えず、大海原の波・波・波で島影ひとつ見あたらなかった。何日かたつて日本に近くなつたのか、遠くに島が見え、山が見え、木が見えた。鳥が飛ぶ。みんな喜んで歓声を上げた。二、三の魚船に会った。日の丸を立てている。みんな「ばんざい／ばんざい／」と叫ぶと、魚船からは、メガホンで「御苦労さん／」と返ってきた。舞鶴港に近付いたらしく、港が見え、倉庫の立ち

6 並ぶのも見えた。ただもう嬉しさに涙があふれた。

岩壁には、日の丸の小旗を振った人たちが、「ばんざい」を連唱していた。

上陸すると、早速、アメリカ兵が来て、大きな風呂場にみんなを連れて行くと風呂に入ってくれた。入浴が済むと、頭からDDTをまっ白にかけられて宿舎に向かった。宿舎では三日ほど過ごし、そこで県別に分かれて汽車に乗るのだった。みんな苦しかった満洲時代を語り合い、お互いの健康を祈りながら、住所などを取り交して車中の人となつて行つた。岩手県人は最後の乗車だったので、ガランとした宿舎に残り、順番を待ちながら、気がせいじしかたなかった。



姑の戦争当時

後藤忠子

はじめて「千三忌」に参加することになり、終戦っ子の私は、「戦争」のことはわからず、恥ずかしいようですが、それでも、千三という人と、セキさんという人の話を聞いた時は、涙がポロポロ流れました。

生きるということは、生やさしいものではないんだ、セキさんのような思いをした人が、戦争当時は、たくさんいたんだ、と思いました。

その所を考えなければ、現在ある、この

生活にたどりつかないのでは、と深く思い、
気づきました。

そこで私は、姑に、戦争当時のことを聞き
出しました。

私が若い頃、姑はよく、「オラの時など、
こったなもんじゃなかった」とか、「今なん
だ、なんぼ楽だが、ほだくたねえ」と、言い
ました。

言われるたびに、また厭味を言っでとしか
受け取れませんでした。

が、今は、姑の今までのくらしに興味を持
ち、少しでも理解出来たらと思っています。

戦争当時の家族は十人だったそうです。

ヤスエ、喜代治という祖父母、和七とい
う体の弱く、よく「腹痛デュー」と言う舅と、
キミ、イヨという小姑、喜一（私の夫）とい
う二歳の息子、それに、東京の知人の娘さん
が、二人疎開していたそうです。

喜七という姑のダンナは戦争に征っていた

と言います。

ヤスエ、喜代治の祖父母は、自分達の「ホ
マツ」にと、一反歩の畑しか働いてくれな
ったそうです。

その他の田んぼと、広い畑は、姑が働き、
小姑達が少々手伝ってくれたと言ってます。
それでも姑は、他の家の農作業の手間取り
にも出かけたそうです。

「田んぼさ、稼ぎさ行っても、喜一さ、乳
けさ来ねばわねがった。」

「食うものも、青モミ入っていで、搗いで
食せだり。」

「米と麦と、カボチャまで食せだった。
ンだとも、疎開の娘っ子ら食えねえって、食
ねがったので、オラ、実家の藤根さ行って、
米もらって来たごと何回もある。」と言いま
す。

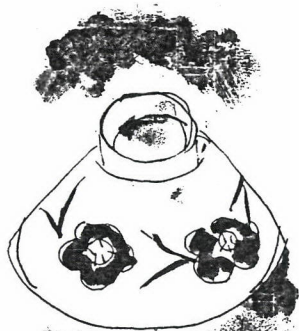
終戦後、ダンナは、帰って来たのですが、
体が弱くなって帰ったので、ほとんど働くこ
とが出来なかったそうです。

肋膜炎を病み、花巻療養所に入り、田を一反歩売って、その費用に当てたそうです。

何年間と、女手一つで働き、子供も生まれ、「喜一は、父さんは体弱えがら、中学校終わるとすぐ、東京さ稼ぎさ行ったんだもの。」と言います。

ヤスエという祖母ともケンカのしどろしどろたりして、姑は氣丈にならざるを得なかったのでしょう。

今はまだ、元気で、「好きなことをしたい」と言っている姑は、いま六七歳です。



針仕事！ 小原

昭

松葉こんいゆ^あにして

カンテラコ灯^あし

木尻でくべなから

セキはっちや 針仕事してる

なに縫っているのかなあ……

新しい布コで

サルへ 縫っている

春の田植えに穿くのかなあ……

他所行きに穿くのかなあ……

ゆがってくても

我慢して こんでくべながら

一生懸命縫っている

「ある戦死」

村上末子

9

一九五八年四月、満州から最後の引揚船「興安丸」が舞鶴港に着いた。菊田時次(仮名)の兄Rもこの中に乗船している筈である。母と共に郷里遠野から迎えに来ていた彼は棧橋を渡る帰国者の中に兄の姿を探していた。だが最後の乗船者が降りても兄の姿はそこになかった。時次は不安そうに船を見つめる母をなだめていたが、船長に事情を話して船内に入って行った。そこに時次の見たものは、懸命に船内を掃除している兄Rの姿であった。十四年ぶりに見る兄は、幼い日の時次の印象と寸分変わらない直面目で、人一倍面倒見のいいあの兄の姿であった。時次は掃除の手を休めない兄に声をかけた。

「兄さん！無事だったんですね。長い間ごろうさまでした。さあ早く船を出しましょう」

「すっかり掃除を済ませたら降りる」

兄は掃除の手を休めようとしなかった。夢にまでみた兄との再会、十四年ぶりの会話であった。

時次の兄Rは終戦の前年まで地元の村役場に勤めていた。その年の春、一枚の赤紙が舞い込み応召、出征先きは満州ときいた。

翌年終戦。やがて村から出征して行った兵士たちの帰還の噂がチラホラ聞こえるようになった。しかし、生きているものやら戦死したものやら、Rの消息は以前として分らなかった。思い余った時次の家族は、当時の留守家族がそうしたように、ラジオの尋ね人の番組に依頼、兄の消息を待った。全国からの反響は殊の外多く、沢山の手紙が寄せられたが、いずれも「今どこに居る」という確実な情報ではなかった。唯一、家族を安心させたのは「終戦まで生きていた」という事実であった。

戦後七年経った一九五二年六月五日、待望の便りが家族の元に届いた。「現在平壤分區衛生科という所で元気に働いている」と書いてあり、更に、近日中に転勤になるので、こちらからの

手紙は書くが、よこしてはならないとあった。「Rは生きていた」。家族は狂喜した。特に母の喜びようは格別で、時次には生まれて初めてみる母の笑顔に思えた。

その後、年に二、三回家族の元に便りを寄せている。Rの便りは自分が帰国したら一生懸命働いて、今までの償いをするから、がんばって欲しい、父母には長生きして待っていて欲しいと常々したためてあった。実はRの出征後に、父と長兄は死亡していたが、家族はその事には触れていない。

一九五七年十二月、Rから吉報が舞い込む。それには最後の引揚船「興安丸」で帰れる旨書いてあった。その日から時次の母は郵便配達夫が来る度にかけて手紙をもぎとったという。翌五八年四月五日、待ちに待った便りが届いた。それには二週間以内に帰れると書かれ、十四年ぶりに祖国の土を踏む喜びの心情が紙面いっぱい溢れていた。そしてその日のきまつである。

引揚者とその家族に当てられた休憩所に三時間程いた。十四年間の兄の空白時間をどのようにして埋めるか、戦後の日本経済、文化、政治のめざましい進展とその変貌をどう説明したらいいものか、時次は迷いながら慎重に言葉を選んだ。母はただただ「よく帰ってきた」を連発するのみであった。

予定の時間が来て、東京へ出発するバスが宿舎前に並んだ。一緒に玄関に立った筈の兄の姿が、バスの乗客の中に見当らない。時次は又も宿舎に戻ってみた。そこでも兄は人々の去った後の部屋の掃除に専念していた。引揚者の中で独身者はR一人であつたらしいから、その事がもともと責任感の強い彼をそうした行動に走らせたのだろう。

東京では三越デパートを見物した。「百聞は一見にしかず」、下手な説明をするより、日本の実感を知ってもらう絶好の機会だと、時次は思った。

戦前とすっかり一変してしまった都会の様子と、物の豊富なのにRは驚き通して、時折深々ため息をもらした。車中でRは話した。

中華人民共和国五ヶ年計画プロジェクトチームの一人であつた事、給料が日本円にして二十四円であつた事等を……。日本では、当時卵一ヶ八円であつたというからデパートでその値段を目の辺りにしてきただけに、生活の不安がよぎつたのだろう、兄はしきりに時次にその事を訊いた。

時次の兄は小学校の時から首席で通した秀才であつた。しかしその秀才にも、日本の円と中国の元との換算が出来なかつたようだ。

「果たして日本で生活できるのか……」。

Rは何度となくこの言葉を口にした。

東京にも、仙台にも、花巻駅にも、Rの同級生たちは出迎えた。この間、友人に囲まれ放しであった為に、母と時次はろくにRと会話をしていない。

村の駅には、地元小学校の全校児童が出迎えていた。家に着いたのは午後一時頃であったが、その間も道行く人々にもみくちゃにされる等一兵士の十四年ぶりの帰還は、凱旋將軍のようなフィーバーぶりであったという。村人たちは夜になっても時次宅に押し寄せ、その行列は数珠なぎであったというから、村あげての歓迎であったのだろう。それは時次の家は勿論、Rがかって村人たちにみせた業績とその誠実な人柄によるものであろう。

その夜、かつての同僚、青年団の仲間、親戚、同級生等、Rの帰還を祝う人々は夜更けまで歌に踊りに興じた。Rの居ないのに人々が気づいたのは、それから大部経ってからの事である。

「便所へ行くから覆いてきた靴出してくれ」。台所の女たちにRが声かけたのは宴たけなわの十時頃であった。彼はその時メモ帳らしきものを数冊出して、女たちに「くどにくべろ」と言

ったという。女たちは何の疑問もなく、燃え盛る「くど」にその書類を投げ入れた。一人の親戚が言った。

「便所に行くんだら、ソウリでも何でもいいべ」。Rは「いや覆いてきた靴を出せ」と頑強に言っ外に出た。

人々の酔いは一ぺんに吹き飛んだ。それから大騒ぎとなり、心当りを探したが、とうとうRの姿を見つける事が出来なかった。

翌朝二〇〇人近い人々によってRの搜索が始まった。身内の数人が墓地に急いだ。そこにはRの来た事を証明する「靴跡」がはっきりと残っていた。一同に不吉な予感が走る。それから一時間後、裏山の本に首をつって死んでいるRを発見したのは同級生Aであった。一九五八年四月二十九日、天皇誕生日の夜であった。

「やっと帰ってきたのに、何して死んだのや」泣きわめく身内の光景が今も睨に染みて離れないと時次は言った。

「あまりにも変貌した祖国を目の辺りにして、生きる自信を失くしたのではないか」、「価値感の切り換えが出来なかったのではないか」等々、生きている人々の勝手な想像はつきない。しかし、死者の本当の心は誰も知らない。

持ち帰った荷物の中にあったのは、こちらから送った手紙や、家族の写真であり、中国での十三年間の暮らしの分る書類メモ、日記のたぐい、果ては写真まで一切証しとなるものはなかった。身辺のものを残さず処分しての帰還であった事を思うと、Rの死は予定の行動ではなかったのかと、私には思える。「天皇陛下の為に」が骨の随まで染みた旧帝国軍人は、その天皇の誕生日の夜に33歳の命を断ったのである。

あれから三十年、今年九十三歳のRの母は今も元気に生き続ける。戦死ではない死を遂げた息子の母には軍人恩給はさがない。母が今も受け取れるのは公務扶助料だと時次は言った。

興安丸最後の帰国者の中には、現在伊藤忠商事相談役、瀬島龍三氏が居たことを私はこの拙文を書くに当って知った。この人はかつて経団連の会長、故土光敏光氏と共に行革推進の中心人物であった経済界の大物である。彼は月刊誌PHPの中に次のように書いている。

中略「十三年間の空白を埋める為に、毎日図書館に通って十三年分の新聞を読みあさり、自分の身心を少しづつ日本の現情に合わせて行った 略と。

激しい時代の流れを乗りきった人もあれば、Rのように泳ぎ

出すこともせず激流に吞まれた人もある。

戦争は前途有望な多くの青年の命を奪った。たった一人息子に戦死され、看取る人もなく佗しく死んで行った親たちがどれだけ全国にいたか知れない。しかもその為に絶えてしまった家もある。高橋セキさんの家も絶えた。

奇しくも今、昭和が終ろうとしている。この拙文が小冊子に編まれる頃、おそらく事態は変っているだろうか、一人息子に戦死された父母の深い哀しみをみて来た私の胸は複雑である。泉下の私の両親や、セキさん、そして昭和史の最後を生きるRの母はどんな思いで「天皇の病い」を受けとめているのだろうか。

為政者かどう繕ろうとも、昭和史から戦争は決して消えない。血と涙染みた昭和が枯れて行く

(1988、10、15)

根^ねの^の乳^ち便^ちり^り
垂^{たら}里^り

媼^{おきな}書^{かき}を^をつ^つま^ま聞^{きこ}

「奉安女殿」の慰霊祭
— 愛国婦人会の戦後 —

・石川純子

■ マッカーサー^{おんが}恐^{おそ}ねくて

愛国婦人会も何も、戦争終ってみな解散させられたの、マッカーサーに。

戦争終って、世の中変わって、気楽でカタゴド良がったチャ。

自主的に民主的な団体ならさしつかえねて言われで、また婦人会出したの。

そいづで忘れねの、和尚さんが戦死者の慰霊祭やるべとした時のことヨ。

本浄寺の和尚さん、活動性のある人だったもな。

県南の花巻がらこっち、今の選挙区の二区全部の戦死者の慰霊祭すつて……応召家族全部さ慰霊祭やるがらて、役場さ通知出して、出席とってもらて。

御遺族みな集めで、拜んでお説教聞がせで、その上に踊りっこだの慰安会のようなものすつべどしたの。

村の人達も何かやりたい時期だったんだな、

そんな頃。

——ン、昭和二十二年か、二十三年頃でねーが？

全村挙げてお寺のやるごとさ、協力する気だったの。

したキャ、その二三日前^めになったキャ、そいなごとやってわね（やってはいけない）「やめろ、やめろ」で騒ぎ始^はねだの。あの頃、進駐軍が何があつと駆け廻^{まわ}つてゐる時代だったもネ。

招待状も出してスまた。みんなに見放されで、今さら困てスまた婦人会長のオレさ、和尚さん、「相談したいがら、来てけろ」て。「止められスカ？」て聞いたキャ、「止められね」て、言うけし、

「一体^{いっしょ}で、和尚さん、何人さ通知出したの？」て。

したキャ、「二万人」だて：

「なんじよスで、どこさ集めるがすタレ。（どのようにして、どこに集めるのですか）

お寺だら、二百人も入らねがすべや」

「呼んだたて、皆来ねべ。二千人位がな？学校の講堂借りで、お寺ど学校の間さ渡り板敷いで、履物履かないで会場作る」て：

村長もわがね、（寺の）総代はむぐれる、学校でもされかまねドなつて（かまわなないとなつて）婦人会さ、すがつて来たのさ。

戦争終つたキャ、戦死者が戦犯にされだべ、戦死者ねぎらう会は罪どなんだもの。

マッカーサー恐^{おっか}ねがらて、かまねでおぐのいいが？（かまわなないでおくのいいか）

「戦死者の奥さんだの、お母さんだの思うど、かまねでおがれね、会長さん、やれるだけやってみスベ」て、ホニ、明日と迫った時だったなア。

結局、和尚さんと婦人会どスで、やる気スたの。

■ 婦人会の味噌汁

なんぼ人來ンだが、味噌も塩もねエ時代、

ホでも（それでも）味噌汁ばりも食セッペて
…。

班長さん達さ、汁椀コで一つずつ味噌寄付
してける、大根だり芋コだりも…て決めで。

味噌も塩も買うようねえ時代だったもな。

そしたキヤ、各部落の班長だち、

「オラも出す、オラも出す。どござれに行
ったキヤ親切にされだつた…」て、味噌、大
っきな桶さ、三十部落の人だちリヤカーでの
つ・そ・り・つけで来て…持って来ねがった婦人会
ダ、戻り帰って持って来タ。（笑）

したキヤ、その日になったら、来るわ来る
わ、こっちの街道、あっちの街道、ぞろぞろ
ぞろ、南都田の道路、衣川道路、水沢の方か
らも、六方線全部が満員なる位。

「一体で何起きだのダ？小山で何あんのシ
ヤ？、水沢の駅えらい混雑だ」て、駅長さん
から駐在所さ電話入ったツも。

したキヤ、村長夕魂消^{たまげ}で、和尚さん役場
さ引っぱっててスまたの。

あんまり人來られで、すっかり恐ねぐなつ
て入までハ、和尚さん一日一杯怒られで帰ス
てよござれね。

一日一杯だヨ。こんでハ、慰霊祭まるきり
メチャメチャ。

戦争をしねて言いながら、それでて戦死者
を待遇したり接待する事業すんのだから、進
駐軍さ知れだら、埒もねえごとになるてハ…
和尚さん思つた通りやらせだら、立派な催
しだったべ、その日になつて怒り始ねで（怒
り始めて）、人來てがら招待主怒つた夕て…

その日お説教頼まれだ和尚様達、京都だの
仙台がらも來たツし、二十六人どか來たつた
ンだド。

清志さんて、ラジオ屋の二階、その人達の
控室だつた、その和尚様達だて誰も接待する
人もいね、一体で何じよなごどでこんなにな
つたのがて、怒つてだつたツ。

ホニ、昼飯も食せられねがったべ。

寺の総代達てば、このクサレ坊主、何して
こつたらごととして！て、十人ばりしてケンカ
して、そいずも飽ぎッとは、ポカンと壁さ寄
つかがって：（笑）

あっちでもケンカ、こっちでもケンカ、来
る人来る人一杯で、何じよに接待してよいの
が。

まるっきり指揮する人、一日いねのだもの。

「何するどこだ？ちゃんと慰霊祭してもら
うべて来たのだ」て、そっちでもちやくち
や、来た人だちもケンカ。ペテンにかけだみ
でなもんだもな。

「誰悪いのだがわがねげつとも、ごさ来た
のは御遺族様ですよ。」

息子亡くして本気なつて来たの、お粗末に
してられね。懲役になつてもいい。呼ばれた
人だちに罪ねえがら婦人会夕頑張っパス」て
：それにしたて、どこさ入れ申すたらしいべ
オレ、そいづでテンテコ舞いして。結局、

学校全部借りで入れる外ねくて。三十八教室
全部だヨ。

「なんとかお願いしたい。見でのわかる通
り、この位の人だもの：」て、頼んで頼んで
：。

日曜日でねくて、生徒いだ時だヨ。

校長さんもようぐ学校ずらり。（全部）解放
してけだつたなア、あの時。

ホデも（それでも）貸すど決めだキャ、先
生ダ、さっぱど帰つてスまで、学校さ寄つて
つかねがつた：恐ねがつて。

マッカーサーなンかに見られだら、皆しよ
っ引がれッから。

遺族は、戦争犯罪人と見なされでだ時だも
の。

婦人会ばり「巡查さん、二日間だけ許して
けらいん。戦争協力して、マッカーサーの監
獄だり、沖縄の重労働だり、直接談判だり行
ぎますから。サンキュウベリマツチ位語れま
すから」：て。（笑）

ンだたて、来た人だちの不满、さっぱど婦人会さ来たの。

責任者いねのだもの。

あん時、和尚さん、世話係さ桜ッコの徽章作ってけでだったもネ。

「その徽章コつけたの、何ダ！」

「おめだち、何の印つけたのや？」「これア、何のさまだ」だのて、胸元つかんで言われンのもあれば、怒られでハ：

ンだたて、ここで止められね、とにかくお汁運べ、運べて、熱い味噌汁差し上げろて、お汁、皆さ二杯も三杯も食せだの。

四月の末で、まだ寒めがったがら、熱いの一生懸命、それ運べ、それ運べて。

ナニ、婦人会が持つて来た野菜だのなんだり、もれくれど入れだ味噌汁だった、家にいでも味噌汁も満足に食われね時代だったが「この節に、こんな沢山いただいて」て喜ばれだったなア。

ナニ、ねぐなったら塩混ぜ混ぜ、ふやして

ハ、その塩だ夕て、岩塩だった。

——岩塩で知ってツカ？

溶かすと下のほうが土で、澄まして上の汁コ食うのが人間の方で、下の方は動物に食わせる塩どしたの。そういう時代に、お汁食わせでやったんだもの。

■「愛国婦人会」時代の力噴き出させて：一番、和尚さんさえ放してよせば良がったの。

村長も村長、切れねえ村長だもなア。恐れねばり恐ねくて一日おしやつげでで。（おさえつけておいて）

こんなに遺族モヤモヤど集めで、ごさ進駐軍来たら、何じよするてばり思つてハ。

婦人会の人たちばり、

「沖縄さ引っぱられるツツ、マッカーサーに連れでがれツツも、皆で行くべスな」て。

（笑）

ナニ、終つてがら駐在所の前通るど、

「まだ、マッカーサーがら、罰則来ねがスベが？」て、わんざわんざ聞いだもんだ。（笑）

おまけに、夜は、夜通しお説教あるって聞いだから泊まる気で来たツ人だちもいで：：何じょにも（どうにもこうにも）、裁縫室さ火鉢に火おごして泊めッペドしたキャ、宿直の先生、学校、今夜の十二時までスカ貸す約束してねドなった。

この人ダ、夜中、どこさ出すべや？朝早く出はて来たおじいさん、お婆さんダ、膝と膝おついで、風呂敷コ枕に寝る人もあれば：達曾部なんツ遠ぐがら来た人たちもいたんだもの。

宿直の先生どオレ、ケンカしたの。したキャ、そいず聞いて巡査さん、ーあの巡査さん、良い巡査さんだった、

「消防の奴ら、なにしてる。この位婦人会忙スのぬ」て、消防集めで、

「この人数配分すッから、おめだちの家さ連でって泊めでける」て、してけだの。

「布団のあッとかさ宿取ったがら」て言っても、

「どうぞ、このまま、ここで夜暮させくないん（下ださい）」て、なかなか起きねがったヨ。

講堂で、劇だの踊りッコするごとになつた婦人会の人だちは、白粉コつけたり、男のように眉逆さに描いだりして（笑）、一日暮らしたな」て、後で笑った夕。

はっぱ（さっぱり）出番ねのだもの。

朝からお化粧して、

「会長さん、いづ踊ンの？」

「もう少し待ってで」：てばり、待たせで終ったの。

相撲甚句だの、瑞穂踊りだのて、いろいろ計画あったの。

初めっから、婦人会は料理と、その踊りコ

の二つ受け持ってたんだお。

肝心の和尚さん、おしゃつけられで、やっ
とこすつとこ、お汁^{じゆ}食わせで、にわかには婦人
会尻ぬぐいしたんだが、その位^け力あったんだ
な。

あの愛国婦人会時代の、婦人会持ってた力
を、そこさ噴き出させでスまたの。

誰も恐^{おそ}ねがったべ。

巡查様だタて、消防団だタて。

したたて、さーどなった時、向こう見ずに
やれんの婦人会だったんでねーが？

あん時、戦争犯罪人がうるせがった時だも
の。

ンだんだ、おじいちゃんも（戦争中、村長
戦争犯罪人で公職追放なって、製材所やつ
てッ時だった。

ンだから、焚き物はオレ出して、製材所の
サッパ板運んで、ドカドカど焚がせだった。
ンだんだ、四月の二十六日だったな、あの日

丁度オラ家で馬^{うま}屋の堆肥^{たいふ}の肥出しで、人頼
んでいた時で、本当は出られね時なのに、二
日も三日も家空けで学校で奉仕したの。

人頼んでッ時「沖縄まで行ってきます」な
ンて、出はって歩いて、おじいちゃん、何と
思ったんだが。

■「奉安殿」使つての慰霊祭

——何で和尚さん、そいなどど計画したがて
？

純子さん、「奉安殿」ツの知ってッか？

そいづ戦争敗げでいらねぐなって、こいづ
神様でもなんでもね、当たり前^めの人間だドな
って、教育勅語など読まねぐなって：

他の町では、あの奉安殿、何^{なん}じよしたった
ンだが？

この村ではお寺の和尚さんが欲^ほすて言つて
名乗り出で。戦死者の写真を飾って祭るがら
欲^ほすて。

そこで、お寺と学校の敷地続いでだがら、

唯、つつつと引っぱってたの。

それで写真集めで慰霊祭すッペどして、この騒ぎ起こしたのヨ。

その筋から言えば、悪いごどではないもな

奉安殿の中さ、写真飾ってもらうのは有難いごどだもの。遺族はみな本気すッさな。

ホニなあ、こいなもちやくちやツ時代もあったんだな。

だりゃ、戦死者が、戦犯にひっくり返って入まんだもの、誰もなんじよしたら良いがわがねがったの、

ホデも(それでも)婦人会ダ、良くやったぢやなあ。

それも愛国婦人会時代がらの力よ。

— マッカーサーから、何が来たがて？

何も来ねの、来ねの。

オラだち悪ごどやったんでねえもの。



高橋セキ語録・2

■ ムスロの遺骨来たとき、
 ロンかこったになって来たってか
 って、箱さかぶりついたス。
 箱の中さ小指ぐらいの骨だった
 一つへえってらったス。
 本当にムスコったべか？
 そうたんべか？と思って、そ
 の骨コナミでみたス。
 「千三の味も包いもしねえ」
 「ムスコったか、とうたか、わから
 ねエかったのス。それでも、これ
 がムスコった、と思うほしかたな
 かったのス。
 そうたと決めてから、気持ちやす
 まったス。(ト石ころに語る母た
 ちより)



今迄、
あまり他人に話た
ことがないけれど

「父と母の戦争」

小崎順子

満州の警察官

仙台の旧制中学を苦学して卒業した父さんは、仙台市役所に勤めていたけど。昭和11年に結婚して、一年ばかり農業をしていたった。

家が没落したから田畑が少なくなったので、満州警察の募集があったので、独りで満州に行ったの

広い満州を手に入れたかに思った日本は、国力のありつたけをそそいだ。その時の総督が水沢の産んだ後藤新平だったようだ。

父さんの兄弟は3人いたったが、3人共皆満州にいった。一番下の弟は満鉄（満州鉄道）の建設に入り、中の弟は徴用で兵隊になって行った。

結局満州で戦死してしまったの。

おまえは3才の時オレと一緒に満州に呼びよせられて行った。満州で一生過ごす覚悟で渡ったのだったな

舞鶴からセイシンに上陸して満州のトモン

に三か月、その次ジュウリツボに二か月いたな、点々として、やっとソオリンで二年ばかり落ち着いていた。

父さんの仕事は警察官だったけど、中国人と韓国が入り交じった町に住んでいたったたいいてい、警察って言うとお怖がられるんだけど、日本人は一人だけだったからずいぶん親切にされたの。

おまえのほう言葉が覚えるのが早くて、買い物に行くときは通訳として連れて歩いたもんだった。

三か國語をうまくはなしていたよ

今いくらか分かるか？、

「そう言われても今はどんなに頭を絞っても日本語以外は出てこないよ、きれいさっぱりとお返ししたみたい、覚えていればよかった！」

終戦の少し前に学校に入れるためといってお前だけ帰してよこした。

「やっと中国語と韓国語を話すようになったところで、また言語中枢の混乱だったから、早く外国語を忘れなければ！と思ったものだったよ。独り住いの祖母にあずけられたのだけど、私にとっては知らない人だったから。周囲は日本語、それだけでも子供の私には驚だった。おまけに、親戚といっても忘れた人達ばかりの中においていかれたのね」

オレは、直ぐ満州に帰えらなければならなかったからな、

「なぜ？おなかが痛くなるほど寂しい、父や母に会いたくても余りにも遠くてどおすればいいのか、学校でも早生まれだた私は一ばんちいさく、泣き虫、と仇名をつけられていたの」

オレは反対だったけど、父さんに逆らうことは出来なかったから……

その間に、正博（次男）が生れたの、

ダイサカや、アンズケンにもいて、そこで終戦を迎えたの……

引き揚げまでの一年

「終戦になってから、帰るまでの一年はどんなだったの？」

父さんも、正夫（父の下の子）も仕事が出来なくなつて、いままで満人がやってたクーリー、水汲みのような力仕事をしてた。

其ほか、内職で巻き煙草をつくつて売ったの。とっても良い金になったた、面白いくらいに。

そのうちに、八路軍（中国の政府軍）が十人も二十人もダンガダンガと、土足で入つてきて手当り次第持つていった。二人の子供をぎつちり抱いてガタガタふるえてばかりいたいた。

いつでも逃げられるように、大事なものをぎつちり詰めて、隠していた袋があった。

それ運持つて行がれたときは、ほんとにがっかりしてしまつて……

そんな事、七回ぐらいあったかなあ。

：だって、どこに隠しても狭い家だからすぐ見付けられてしまふし、

いろいろ考えて、父さんが

「草履の上の方を、キレイにナイフで繰抜いてお金を入れて、また蓋をして縫い付けて、泥だらけにして土間に転がしておけ」って言うから、

ビクビクしながら見ていたら、どやどや来てその草履踏んずけて行つてしまったの。

それからだいたい飲み込めたから、着物なんかは絹のいい物を解いてしわだらけにして結んで、部屋に投げておいた。

其かわり、木綿とかあまり良い物でないものを奇麗にのばして箱に入れてたら、持てるだけ持つて行つたつけ……

終戦から一年近かつたら、全部の押し入れに目張りをして、中の物に手を付けさせないようにして行つた。

そして、米と味噌とキウリの漬物を四斗樽

いっぱい貯えておいたの、それも四人がかりで持ってがれてしまったときは、何持てなかったときより悔しいと思った。

「食べ物をもんな持って行かれたら、何食べたの？」

コリーヤンと粟少しばかりあった。

それから間もなく昭和二十一年八月十五日になり、丁度敗戦から一年目に八路軍が来て父さんが羅致された。

子供一人おんぶして、一人は抱いて隠れてガダガダって父さんが連れて行かれるの見たのだ、



戦前と

今

・高橋ふさ

天皇陛下の御病気に伴い、過剰な報道や自粛が、一度に火を噴いたように問題になっている。戦前の教育をうけた私でさえ、首をかしげなくなる程だ。

何かしら逆戻りしたような錯覚にいられて、幼い頃を思い出して見た。

25 当時、小学校の校庭の西南の隅に建

てられていた奉安殿ほうあんどん（教育勅語の謄本と天皇・皇后の御真影を奉置する場所）から、四大節の式の時、教育勅語を入れた桐の箱を運ぶのが、教員先生であった。礼服に身を整え、恭しく捧げた。真っ白い手袋が今でも眼に沁みるよう

だ。校庭で遊んでいた私たちは、いこいでも最敬礼をするのだった。

朝礼の時、休めの姿勢で校長先生のお話しを聞いていても、「畏れ多くも天皇陛下におかれましては……」の言葉に、素早く中々々と足を揃え不動の姿勢をとり頭を垂れた。

このような教育をうけた私たちは、戦争になり、お国のため、天皇陛下のために、勇ましく出征する兵隊さん

駄頭に送るたひ、うして女に生まれ
たろうと齒きしりする思いたった。
ひもいとお腹で、継ぎのあつた作
業服に、破けた地下足袋を穿き、夜勤
の火薬運搬のトロッコ押しをした学徒
動員の地でも、支那事変で父が戦死し
た友人と二人で、従軍看護婦として戦地
に行けるから、赤十字看護婦になるこ
とを誓いあった。

皇軍も留守家族も信じて疑わない勝
利の道であつた。勝つために全国
民、命を捧げて戦つて来たのだから敗
戦のシヨクは余りに大きかった。

そのとき、男の子も四人の中、二
人戦死、一人は未帰還だった六十過ぎ
の父親は、思わぬ叫んだそうた。
「天皇陛下、まんまんとしていられ

なやひかやし
それを聞いた人は、「まんづたまけ
た」と言うもんなつけれと言つていた
のを、今まざまざと思い出すのである。

高橋セキ・語録

「これまゐ、千三をすしの子
オレの子ともた、オレの子ともた、
と思つていたが、間違いたつたス。
兵隊にやりたくねえと思つても、
天皇陛下の命令たればしかたねス。
生まれた時から、オレの子ともてな
かったのス」

小原徳志編・石ころに語る
母たち（未来刊）より

にらの花

・高橋つか子

異国の地で夫を失い
育ち盛り四人の子を抱え
海を渡って引き揚げてきた姑^{はは}

曇天の日が続くと
疲労の塊が脚 腰にくると
痛みを訴える

「塙^{はな}だけは太事にして
子になめさせたし」

死線を乗り越えた言葉は
激しくあかるい

雑草の中の

にらの花に似て

包いを激しく漂わせ

純白の小花が

こぼれ落ちそうな言葉を

球状に包んだまま咲いている

私は洗いあかるさにひかれ

沈黙した白々に潤いながら

満たされていく



「なにだえ、ばいながら
(14歳) 征か、ねの、だ」と
おふ、ろ涙流すのよと

・高橋二三男先生(57歳)
北上市常般血口・は

語る

・遺骨は軍神

——俺は、昭和六年生まれた。若けえと、
若けえたって、六十になるべちゃ。
あ、二年たったら、六十になるべ。
今、五十七なんだ。一月生まれたから、

昭和六年一月四日生まれ、
厳密にいえば、十二日生まれた、たら
しい。扱けらえた。
あかし、そうだったべ。
和賀町の山に生まれ。
生まれたのからいへば、
兄弟は、男だけ九人。
あと、戦争一年続けた、
「東條英機は表彰されたべ」って、
親父、言ったたさ。
俺は、双子で、戸籍よは三番目。
次男だが、双子で戸籍は三番目だから
二三男の名前付けたって、
親父が言うわけ(笑)
俺のけわれは、一年もたたねうち、に
亡くなったあともな。
あ、一人も亡くなったすま。

うたかう、現せて、
長く生きたいの、七人サ。

——俺は、尋常高等小学校の卒業サ、
うたかう、今の中学校二年生たな、

その二年生の時に、ホウ
戦争中たから

「少年兵、受けろして、
誰かに、その頃の教師たか言うわけた。

小川九一さんが、山は小学校の担任たつた、
校長になつた人たナ。

その頃は、この教師も
「男子たる者、兵隊さ征け!!」って、

こうたつたわけた。
「少年兵、受けろ!!」と、

昭和十九年たな。

——そこで、二ついう事、あつたのサ。

「少年兵、受けろして、
こう言われて、俺の同級生がサ、

「そう言われた、
あたしは征けません、って言った。

「なんたドレ
「オウ、長男たナ、

「オウ、家、その、守らねぬ、と、
すたう、

「貴様!!」それで、日本男子といえる
かッ!!」ってサ、

竹が飛んできて、ふっ叩かれて、
コト出すたもんだ。

そういう時代たつたんだ。うたかう、
誰でもかよ、とにかく、

あつかねえもんだから、
「ハエツ、兵隊になります、と、

30 「進んで征まします！して、

こう言われねえ、
避けられねえ、たんだを……。

そういう時代。

うたけれども、あゝ同級生が、

叩かれても

「うたって、俺、家のことを考えれば」

なれたって、征けねえ……して、

泣きたから

訴えろんたけなあ……。

あつ叩かれて、はたかれて、さえても……

うたから、大分は、やんたと思つたは

すてもたふ。

俺は、やんたを、思われかつたからね。

とうせ、征かれねえと思つてらから。

二男たし……ねえ。

兵隊すの、立派たと思つてらから……。

「軍神」なんて言われて

死んだって、「神様」にされる。

つていう……。

俺、信じたからね。

そして、ホウ、あゝ頃

「ハンカイ、ハンカイして、

召集令状、きた人たちが送り出すんだ。

俺、横川自駅まで行ったんだを……。

兵隊送り出した汽車で、遺骨が、帰っ

て来たんだを……。

さえても、俺は、あまり不思議と

思われかつた。

あたりまえと思つた。

あの遺骨は、軍神たて、

俺は思つたのな。

うたから、命を……

考えねえ、たんだをね。

死んだって、神様になつて
生きかえるんだってサ。

その頃のこと、俺なりに
思い出してみれば、
確かに死ぬたろう。

兵隊さ征って、死んだ遺骨が
帰ってくるの、見るスサ。

たけいも。死ぬとも、神様になつて
俺は、日本の国を守れるんだって、
いう、そんな気持ち、もう、わしの
体にあつたんだあ……

・判子を隠す

——そして、受験に行つたのサ。

行つたのは、その中でも、三人が四人。

31 実際受けたのは。同級生は、男、十六人。

たつたから、男女共学たつたからね。
三十何人、男女共学たつたからね。
まず、受験に行くことにすて……

行く時に、その……

判子突かねね、やっはりよ、

その願書サ。親の判子ねねわねエ。

志願するのだから、

ろたて、二十歳になれば、絶好、

「徴兵」に征かねねのだから。

その前に征くのたえは、なんだって

親の承諾取らねね。

その時、十四か……

——判子、突く時は、

こういう事あつたの。

親父はサ、こつと言つたの。

「こつ」せ、二十になれば、征かねね

「た、かう、今のうちに征ったほう、えん
たし、と親父は言ったのサ、ねエ。」

「親父だって、いま俺、思うんだけども、」

「息子死ぬん、思わねえで、」

「そう言ったい、俺、思うよ。」

「そして、ホウ、」

「二十になれば、征かねかへし、」

「同級生が、二十になって征った時に、」

「お前は少年兵で征ってれば、」

「位、この高くなつて、お前、得するた」

「から、征った方、えんたねえか、」

「国のためにもなるんたし、」

「こう、付け加えるわけな。」

「そせは、ホレ、はあ、俺、」

「同級生より、偉くなるんた。」

「や、ほりせは、俺の工工たか、」

「あつて、」

「親父は、それで良ったのサ。」

「俺の親父っていうの、営林署で働いて」

「らたし、」

「三反百姓なんだ。」

「——おふくろは、征くつて言うのサ。」

「うた、俺は、抵抗したわけよ。」

「「ちゃんたし、」すたら、おふくろ、」

「沐う、判子、突かせた、ねえから、」

「隠すてすま、たわけた。うて、俺は、」

「タニスから、何から、おふくろ居ねえ」

「時に、ひ、けらかすて、」

「親父、征け、て言ったのたすサ、」

「親父の、」

「ひ、けらかすて、判子、」

「突いて、出すたの。」

「そして、受験したの。」

おふくろに、怒られもすた。た
叩かれもすた。た。
「なにたえは、いまから、
征かぬわのたし、と。
後で、また、厳しいこと言われたといえ。

・おふくろは国賊

外見せねえような、列車でサ。
夜は、歩かせたの。
「たいたい、あの頃、
空襲で、やられたからね。

——今の黒沢尻西小で受けたのな。
一つはいった。

北上から、沢内、東和町も含めて、
和賀郡全部だから。

そこで筆記試験受けてサ。ハッハッとい
採点されて、まず、合格にべ。

一定の身体検査も受けてサ。

二、三日経って、才二次検査もすた。
霞が浦航空隊まで、行ったわけよ。

あそこが、才二次試験。

ろろ
団体列車で行ったの。兵隊が征く時、

——一カ月くらい、たってから、

合格通知きたの。

役場の係が持って来たわけよ。

「合格した！レって。俺は、「ハンサイン
すて、校長先生なんて、

「えかった、えかったレって……」

山口から、もう一人合格したの同級生。

俺は海軍、彼は陸軍だった。

俺は、その合格通知持ってサ、

あれは、春先だったいやな……。

34. おふくろが、田んぼで、田起こしすて

うた、田木鋏で。そこさ俺行つて、

「か、ちや!! とれた! エ!!」って言った。

すたきや、おふくろ、

「なににたに!!」って!!

「なににたに!!」って!!、とれたアッ!!

「あや!!」ッ、やっほりか!!」って、

田木鋏、投げてさんてサ、田の畔^{そば}さ座

ってさんたわけよ。

いま思うと、俺、情けねえ人固サ。

うたかう、涙出てくるんだいね。

「なんで、喜ばねえ!!」って、

俺、言っただけよ。

すたきや、おふくろ、ホッ、ホッ、

と泣いてサ。

「うたうて、二十になつたら、

なになつて、征^{せい}かねねた。

なにすて!! 同じ生まれでさたら、

早く、死なねねのた!!

「なんで、こんな目出度い、

喜んでけねえのた!!」

「なんで、早く死なねね!!」って、

何回もくり返された。

「母親っていうものよ、お前^{めづ}こで、

お前^{めづ}はりでねえ、お前^{めづ}たかこい、死

ぬか、生きるかで生んだんだい。

すたら、一日でも長生きしてけろ。

思うべ、おふくろすの、そういうも

んなんだ、この馬鹿たれ!!

そう言われたって、分らねえのス。

軍国主義、頭さ入ってらへすサ。

くさね、おふくろ!!、思ったわけ

よ。

「憲兵呼ぶ!!」「警察呼ぶ!!」

「国賊！して呼んだのサ。

お、くうは、

「何言われたってええ。呼んでもええ。

銃殺になるかもすれねえ。うたって、

親すもの、子ともか生きるこい、一番

なんたして、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、

涙流すのよ。

俺は、ふせえて、腹立てて、ふさ、

帰ってさんた。

親父た、て、死ぬせたいわえって、いう

気持ちあった、思うよ。うた、こい、

親父の方は、男た、たへス、軍国調た、

っちへス。

——そして、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、

35 校にしたからね。

結果的には、二十年の八月に入隊する

って、いうこい、た、て、ら、た、え、ち、や、

先き生まれの連中か、いん、いん、征、ち

やったから、た、た、た、た、た、た、た、た、

に残されてしまった。

そして、ホ、ホ、ホ、空襲が激しくな、て、さ

んた、から、九月一日に延期する、て、

言われたの、入隊を……

い、こ、た、け、え、奈良県分隊。

そして、八月十五日には終戦だ。

結果的には。

俺より先に生まれた人たちは、

征、て、空襲にな、て、死んでるのも

え、る、た、よ。

そして、まあ、俺は、生きた、た、ん、た、

な。征、か、ね、え、さん、た、ん、た、を……

負けた日

「八月十五日の気持はネ、

また、こす、分かねえとも、

また、今、思い出すてみれば……

天気は、良かったなあ……

俺、兄貴、爺さまとすてサ、

ホウ、後藤野飛行場で、この辺り

爆撃が激しくなつたもんだからサ、

一生懸命、家の後さ、防空壕掘ってら

ぬよ。そすたら、ホウ、

「触れ、みで、な、の、回つたんだよな。」

「なんた、ズレ」

「天皇陛下の重用な放送があるスレ

いか、なんた、かた、すからよ。って、

十二時たな。確か。放送は、

ラシオあつたんだ。おらほさ集まつたけ。言つたのよ。そえて、俺は、

「重大ニュースたつていう話すたいやレ
いか、こうたへい、か、つて、言うけい、と、

俺は、

「は、ソビエトさ、おし、て、の、

宣戦布告たべ、かた、し、と思つたのよ。

え、つ、つ、と、「戦争た、日本勝ねえし

つていう、頭あるもんだから。」

いよいよ、ソビエトも攻めできたんだ

から、それに対して、日本は、

また、なんのつて、喋つてねわけたべ。

いよ、いよ、ソビエトの

戦争たない、俺、そう思つてらわけた。

俺、言葉、分からねんたをや。

大人たち、分る人、一つ、い、る、べ、い、

「日本、負けた！、し、つて、

言つたのよ。そえて、俺は、

「ねえに、すたって、」

「日本、負けるはずねえ、」

って、叫んだら、

「うたに、分らねえ、」って、

おふくろに、言われたのサ。

「また、始まった、」って、

おふくろと、ケンカすたわけよ。

前のこどももあるから、

隣りの人たちも来てるから、

言われたのよ。

「ふみ、その通りなんだ。」

日本、負けたのよ。

「おめえたち、」

寄って、たかっ、俺のこども

馬鹿にするのか、」って、

やっちやったわけよ。

うたって、かたって、

「負けた、」って、こう言うけすサ。

たんたん、たんたん、

おふくろ、たの、周りの人たち、

ホロツ、ホロツ、と、泣くのさ。

俺は、その意味、え、この分かねへ、

とにかく、そのけえの頭すかねえのた

から。

「たに、泣いば要ねえ、」

こう言ったのサ。

——和賀仙人へ鉾山しになあ、

捕虜えたたべちや。

アメリカの捕虜、えたんた。

えたのす。

そこに収容所があってサ。

和賀の鉾山で働かせたらたべちや。

すたら、それが、たたち

出て来るような、
 そういふ噂があつたの。

ホレ、飛行機が飛んで来て、
 アメリカのたよ、

飛んで来て、落下傘で、
 武器、降ろすてさんたわけた。

そえ、見たり、固いなりすた人
 あつたわけよ。

「あつたわけよ。」

「あつたわけよ、飛んで出すて来て、
 殺すしやッ、」

こうなつたわけよ。

鉄砲の、ほす、つそれ

皆、持たせえらえたをの。

その捕虜が……

「そういう話し、飛んで出してきつたの
 し、」

「あつた、俺、固かせらえたの、
 あつた、鬼だ。」

股裂ぐズ、鼻と、い、
 固かせらえたわけた。

「絶対、それされるゾ！」

「それ、あつかねえ、
 これから、ないよにたるべ……」

俺たち、これから、ないよにたる……
 そういふ、不安が、かーアツと

出たわけ。そえ、俺も
 「やっほり、負けたんだと、
 なんとか、そう思ったんだなあ……」

いよいよ負けたト、アメリカの飛行機
 は、ゆうゆうと、飛んで行くすサ、

ラジオ固いたつて、
 「日本、負けたし、と言つてゐるすサ、
 「クソッ、」と、思つたつた、
 あの時は……」

・父憎み母尊敬

— 俺の親父というのはね、

「家は、三反百姓で、お前たち

兄弟も多い、財産は何も分けるぐらい

ねえんだして、

「とにかく、借金までもえから、

お前たち、かんばって、学校さ入って

ゆいたらはな、この世の中、きつと、

そうなるから、学校さ入れして、

こう、言われたの。

それで、兄貴も先生たからサ、

兄貴は、尋常高等小学校すか、

終ってねえからサ。それから

師範学校さ行ったの。

俺は、師範の予科さ行ったからサ。

— 頭悪くたって、本コ読んたり

なんとなく、先生たちの話しコ聞かす

いサ、

「民主主義」とは、なんたすこい、

たんたん、たんたん、考えできたべ。

そすてくるいね、

二十七年から、俺も教師すたから、

二十でね。そして、今たえは、

「組合」というの、ここの、と

言ってるけいも、

「黙ってる組合」さ入ってるたが、

入らせられる状態の中で、

そういう中から、たんたん、こう、

「民主主義」とは、すばらしい、

い、俺、思ったわけよな。

その時は、おふぐろが、

「死ぬたよ」とい、

「一年でも長生きしろ、と言った意味が、分ったのサ。」

そして、親父がねエ、

あの時に、

「兵隊さ征けし、って言うた親父が

憎たらすぐな、たわけよ、俺は、

二十過ぎでからたいや。

二十過ぎだから、酒を飲めるようにな

つてきてサ。飲んだ時、

親さ、食って掛かった事、

あるたよな。

「親父や、なんたして、

結局、親父は、俺のいこ、

死にさ、征けっ、いきたべ、して、

こう話し、すたわけ。(笑)

ゴニホ、掘ったわけ。すたきや、親父、

「いや、うたって、えすか、征かねね

か、せは、親っていうのは、

死ぬって、いうことなから、たけい

征かねねのた、たら、早く征つて、

人より早く偉くなれつたこと。

「そえおか、立身出世つたか、し

い、俺、やっちやったわけだ。

「おふくろの方、立派な、し、と言っ

たのサ。

俺のおふくろ、小学校三年すか、

終ってねえからなア、

俺も字下手だけとサ、

もつと、下手なおふくろなんだ。

漢字なんか、せんせん

書けねえかったからな。

俺の親父というのは、むかし

中学校さ行くって、言われるくらい

勉強好きな人だったからね。

うたから、俺、親父さ、

酒飲んで言ったわけよ。

「親父の方、確かに勉強すてて

頭良けいも、

あふぐろ、漢字も書けねえ、

ミミズ這ったような字すか、

書けねえいも、俺は、

いっちかっていうい、

あふぐろ、偉いという見方持ってるし

い、すたけえ、親父、

「うたべなし、い、言っただけな。

うたから、俺、いまだに言うよ、

一番、尊敬するの、「あふぐろしつてな。

・たのむ！

41
—教師やって、俺、湯本に居たっ

からね。

細井っていう人かいてサ、

旅館の人だったか、

やっぱり、先生すたんで、

あの頃、五十近かったべ。

「いや、これたけは、あなたさ

言っておくからなし、と。

「俺も教師すたしと。そすてホレ、

川尻駅まで、歩いて、

兵隊さ征く、教える

見送ったド。

駅まで行って、こっちで、皆、

わやわやてるべし。

その時に、こう行つてたずあや、

「教えるの片側に身を寄せて、さうと

「生かてこよしと……」
そつたこで、周りさう聞けたら

大変なから。

「せめて、抵抗出来たの、

そんなやすか、なかつたし、

言うわけよ。細井さんは。

「そんなとすれば、スッって、俺は、

小川九一校長の話す

箇かせたわけよ。

「たつて、あの頃は、と、言つて、

なくさめてくれた。細井さん。

「俺が言つた気持、誰も持つていたは

おらんたし。

「たつて、世の中、それが言えるか、

言えねえか、言つたもんで、

大変なという事か、あるわけな、

そこを理解してやらねえかねかたし

って、言われた。たつ。

うたから、俺、この通りたから、

「俺は、教師やつたて、

校長やつたて、なにやたつて

い、たつて、世の中きたつて、

戦争たけは、絶対ダメだ。

戦争やうねね、教育しろたつて、

戦争はダメだつて言えろ

教師にたりてえ、しつて、

言つた。たつ。

「ウケッ！」

俺のやれねえで、たつて、しつて、

細井さんには、言われた。たつ。

八一九八八・十・十三・

記録・小原麗子

千三忌

兎玉智江

子孫の為に、
戦うのだと言って、
頭の良い 弱い人間は、
殺し合いごっこをして、
破壊ごっこをして、
泣きながら、
終戦を迎える。

そして

また、千三忌を考える。

その繰り返しは、

滑稽ではないか。

(一九八八年 一〇月二一日)

トラ、ライオンの生贄は、
弱い野牛であり、
弱い鹿であり、
タイミングの悪いゾウであったり。

戦争は、

人間が考えて行動する。

日本の為に、

先祖の為に、

あとがき

死者の位置

・山原麗子

いま、昭和が終ろうとしていま
す。思いみれば、と、改まった
気持ちになり、この「あとがき」を
綴ろうとするのですから、妙なもので
す。

戦後 四十三年、今年はずに、「戦
争体験」を綴ろうという動きが、多か
ったと思います。それは、四十三年た
って、やっと語るこゝが出来るとい
う思いのためでしょうか。それとも、戦
争体験者が老齢となり、今語らねば、
語りそびれるという、時代の急迫感の

せいでしょうか。

自分の余命が、いくばくもないと思
った時、人は、「死者」と同じ位置に
立つのではないか、と思います。

「去る者は日々に疎し」の「ことわ
かに通り、死者は日々に忘れられるのも
事実ですが、逆に、わたしたちは、日
々、「死者」の位置に近づくのだと思
います。

北上市鬼柳町の三田喜代さんのお母
さんは、十年前、八十四歳で亡くな
ったといひます。

生前、三田さんが、病床に見舞うと
、戦死した長兄の墓を建ててやりたい
と言ったそうです。

長兄は、妻と三人の子を残して戦死、
今は、その遺骨も中年になつたといひ

ます。

三田さんは、「ここに、墓もあるべ
ス、と言いい、それならは、仙壇を新
しくした方がいいだろう、と勧めたと
言っておりまして。「墓もあるべス」
とは、もちろん、「先祖代々の墓」で
す。

セキさんの墓石のことを聞いた三田
さんは、亡母の気持ちを推し量っている
ようでした。三田さんのお母さんとして、
日常のくらしでは、いつもいつも、亡
き長男を思いつづけた、ということでは
ないのかもしれませんが、田所を巡
るように、「死者」の位置に立った時、
途中、命を断たれた長男の生涯が、不
憫で、「墓を建ててやりたい」と切
実に思ったのだろうと思います。

八月三十一日、NHKテレビで、NHK特集「八年目の停戦・イラン・イラク戦争」を見ました。

そのテレビを見ながら、「武器」は最初から、人を殺戮するために、生産するのだろうか、と思いました。同じ生産でも、作物ならは、人を生かすために作られるでしょう。

「武器」は生産しても、使用しなればいいのだ、使用させる国家が、問題なのだ、と思うべきなのでしょうか。か、「生産」されなければ、「使用」の有・無はあり得ないでしょう。

武器を生産した者たちが、家族と共に、夕飯の食卓を囲んでいる時、その「武器」で、大量の人間が殺戮されているとしたら、そのホーウを持つ手が

直接手を下さずとも、直接手を下したように、透けて見えてくるものがあります。

「武器」と商品なのだから、需要があればこの国にでも売るといふことなるでしょう。

「イラン・イラク戦争」でも、同じ国の製品である戦車か、戦場で対面し戦ったといえます。

イラン人は、イラク人を殺したと思ひ、イラク人は、イラン人を殺したと思つてゐるでしょう。か、イラン・イラク人は、他の国で生産された武器によつて、殺戮されてゐるのです。

いてもたつてもいられたような気持、絶望感とむだしさを覚えてしまうのは、こういう時です。

イラン・イラク人は、身内、同国人を殺された「悲しみの位置で、同盟し、戦うべきは、この「武器」との（生産する）戦いではないか、と思つてしましました。

高橋

ニ三男先生のお母さんには、ニ三男先生が、少年兵に志願し、合格した時、「母親っていうものよ、おめだちごと、死ぬが生きるかで、生んたじや、そすたら、一日でも長生きすてけろと思ふべし、とも言ひ」
「二十になつたら、たんだって、征かねた、なほすて、同じ生まれきたら、早く死なねねのたし、とも言つたといひます。

同時の大方の母親も、同じ気持であ

ったたううと思います。そしていまも、
「子の長生き」を願わぬ母親はいない
でしょう。

戦時中も、戦後も、母親は、同じ位
置に立っています。か、二三男先生が、
「軍国主義」少年であつた時、「子の
長生きを願う母親」は、国賊となり、
二三男先生が、「民主主義」に目覺め
た時、「子の長生きを願う母親」は、
尊敬する人となつたのです。

わたしたちは、この事から、様々の
ことを読み取らねばと思います。

戦時中、母親の愛情が、父親や、息
子の意志に勝てなかつたのは、なぜか、
また、民主主義の世の中であつては、
子は生き、長らえることが出来なかつた、
という二こと、ないをです。

「民主主義」は、占領軍によつて、持
たうされた、ともいいます。それが、
この国に根付き、わたしたちの心に育
つたか、どうか、今、問われているの
だと思ひます。

昭和二十二、三年頃、伊藤まづを媼
たち、一母親たちとは、戦時中の「愛
国婦人会」と同じ工ネにあり、一奉
安殿で、戦死者の慰霊祭をやるう
したそうです。

マツカイサーに、何か言われたか
たか、と問われて、まづを媼は、
「何も来ねの、来ねの。オウたちが悪
い、いやつたンでねえもの。し、と答へ
てあります。それがまるで、下絵のよ
うに、今の状況と重なります。

それにしても、未子さんの書かれた
「ある戦死しは、シヨウウでした。
敗戦後、十三年振りに故国の地を踏
んだ、元兵士は、その親いの席から抜
け出し、自の命を絶ったのです。
元兵士は、その位置から、わたし
ちに向い掛けています。わたし
その死の意味の、何であるかを向
わねはなりません。
もったいも、ふさわしい時期、それが
今うたと思ひます。

へ一九八八、十、三十、記

■ 別冊・おたぎ・NO6

■ 1988・71・6発行

■ 岩手県和賀郡和賀町長沼

セーゾクセーゾ 麗ら舎

■ 麗ら舎読書会

